

# 祭の祈禱所

## 紀伊徳川家と高尾山

25

明治大学博物館 外山 徹

### 祈禱所の再興

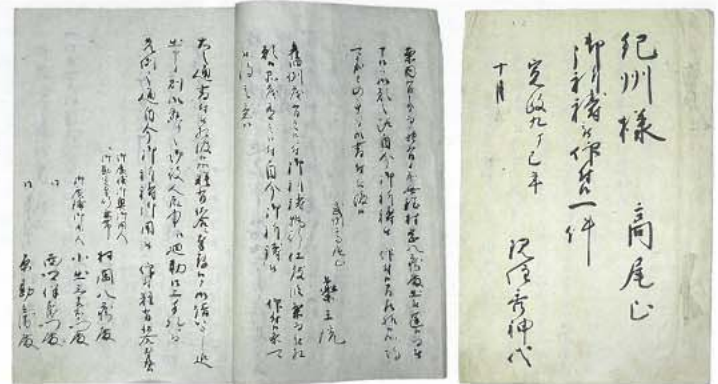
天明六年（二七八六）に恒常的な祈禱依頼の關係が停止してから四年後の寛政二年。翌年に控えた湯島出開帳への紋幕の寄進を願ひ出る書面が残る。同時に作成された歴代藩主の祈禱依頼や仏像・什物の寄進を記した由緒書からは、関係復活への強い念願が伝わってくる。

### 御札守献上の願ひ出

それから七年が過ぎた寛政九年（二七九七）。機会は巡ってきた。多摩郡荻久保村（杉並区）の井川忠三郎は古くから護摩檀家だったが、「紀州様御出入り」の人物だった。ここでの「御出入り」の中身は不明だが、江戸後期において、大

門という人物に引き合わされた。彼は紀州藩土村岡八蔵の用人で、ここで主人村岡への面会を願ひ出る。村岡は御広鋪御奥御用人という役職にあつた。「御広鋪」とはいわゆる奥向きのことで、御用人は藩主と家族のプライベート空間を司る役である。今風には執事という立場になる。葉王院文書の中にはこの間の動向を記した記録が残り、少々微に入るが、山主秀神のその都度の応対の様子がリアルに伝わってくるので紹介してみたい。

二〇月二五日に面会が実現し、村岡宅を訪問する。秀神が着いた時にはまだ村岡は帰宅しておらず、応対には奥方が出てきた。この時、土産として村岡に白縮緬二反、奥方にも干菓子を用意していた。そのやり取りが眼に浮かぶようである。村岡は暮れ六つ過ぎに藩邸を退出。ちょうど日没の頃、旧暦の二〇月半ばということであれば、午後四時半



祈禱所再興を願ひ出した際の一連の出来事を記した記録

く村岡が出席、「お願いの趣、自今ご祈禱仰せ付けられそうろう」との書付を渡された。退出の後、村岡と同席の七名及び御広鋪御用達五名に対しお札を述べ、祈禱を仰せ付けられた旨の口上を手札に記したものを渡している。

### 藩主へのお目見え

翌二五日は村岡宅へお札に訪問。この時、藩主治宝へのお目見えを願ひ出ている。ところが二七日日になって急用が出来、滞在を切り上げざるを得なくなりました。翌日、急ぎお目見えの延期を願ひ出るため紀州藩邸へ村岡を訪ねるが、生憎と不在。たまたま行き逢つた同席の山本吉郎左衛門に願書を差し出すが、村岡宅へも出向いてみる

と、幸い在宅していた本人から「ごもつもの御事」と返事を貰うことができた。二九日に帰山。井川からは「芳村様」へも進物をという助言があつた。姓のみで呼ばれ

ていることからすると奥女中と推測されるが、紀州家の内情に通じた者の手引きは有効であつた。明け寛政一〇年の正月。江戸城にて將軍家治に対する年頭御札を済ませた翌七日。村岡宅へ参上し、お目見えを願ひ出た。「おついでござ無く、さうろうてはいい済み難く、二十八日頃ならではあり済み申すまじき」という返事だつた。初めには祈禱所再興後、初めては御札守を献上する使僧が遣わされ、治宝には箱入りの御札守と扇子箱（〇本入りの三宝）付、御広鋪御用人八名へ御札守と扇子二本、同様に御用達五名へ、また、芳村様へも村岡を通じて御札守を届けている。

二五日になってようやく村岡から書状が到来。「お目見えの儀、来る二十八日御登城帰御の節仰せ付けらるるはず」「同日朝五つ半時頃遅れざるよう表御衣関へお出ならるべく」とのこと。そして、「当事（現在の意）厳しき御省略につき、差上物等の儀は一統御断り」と強く申し渡されており、祈禱所復活は特段の配慮によつて実現したことを窺わせる。

### 十代藩主治宝

九月の祈禱と御札守の献上が続くことになる。十代和歌山藩主徳川治宝は明和八年（二七七二）六月一八日、江戸上屋敷に出生した。幼名岩千代。半年をおかずして実母を亡くし、父重倫は安永二年（二七三三）秋に帰国し、そのまま隠居してしまつた。幼少ゆえ藩主は大叔父の治貞が継ぐが、安永六年にその養嗣子となる。寛政元年二月、治貞の死去にともない藩主に就任した。『南紀徳川史』には寛政二年七月二八日付の記事に「御勝手御難渋」とあり、翌三年、さらに四年と毎年同様の記事が続く。四年一〇月には家臣の半知借上げの期限となるが、藩財政は未だ窮乏状態にあつた。当初の政策は農村復興による年貢増収策だつた。耕地を開発し用水の整備をおこなつたが、時代はその先を行つていた。経済に明

るい中下級藩士を登用するとともに、領内の産物を取り扱ふ「御任入方役所」の改革に着手、産物の専売制を強化し、他領からの物資流入を制限して産業の育成を図つた。重商主義に寄り過ぎ、農民騒擾が発生したことから文政七年（二八二四）に藩主の座を退くが、その後も続いて藩政に影響を持ち続けた。

一方、文化面でも、藩校を設立して学問を奨励。本居宣長を藩領の松阪に招聘した。茶道の表千家との関わりが深く、絵画も嗜むなど多才な一面を持った。秀神がお目見えした時には、満二六歳の青年藩主であつた。

おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

《参考文献》落合延孝『猫絵の殿様・領主のフオークロア』（吉川弘文館、一九九六）、笠原正夫『紀州藩の政治と社会』（清文堂、二〇〇二）